

MATSU BARA SITE
松原遺跡 IV

市道松代東63号線道路改良事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野市教育委員会

序

平成5年3月、「高速道路」長野自動車道・上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事でありました。また1998年長野冬季オリンピック開催に向けての施設建設や従来停滞していた道路整備などにともなう工事も着々と進み、長野市の景観も徐々に変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求めろ除に地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

当遺跡は、千曲川の氾濫によって形成された沖積地上に立地しております。今回の調査範囲は非常に狭いものでありましたが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第63集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連続と縦られてきた人々の歴史のほんの一部にしかすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました有限会社小林正信工務店、新協建設株式会社の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

長野市教育委員会
教育長 滝澤 忠男

例 言

- 1 本書は、市道松代東63号線道路改良事業にともない、平成4～5年度にわたり実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野市松代支所土木課の依頼を受け、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地は長野市松代町東寺尾3192-1番地 他に所在し、実質調査面積は1,070㎡である。
- 4 本書の編集は飯島・寺島が担当し、執筆分担は下記のとおりである。整理作業は各調査員が分担し、これを補助した。

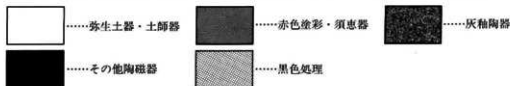
飯島…第I章、第II章第1節・第4節(2)・(3)、寺島…第III章第2節を除くその他すべて

- 5 特に弥生時代中期後半の石器・石製品等に関し、その選別・実測・浄書・原稿執筆については、久保勝正氏（三重県立斎宮歴史博物館学芸員）・久保邦江氏（奈良市埋蔵文化財センター技術吏員）にお願いし、第III章第2節でその玉稿を掲載した。記して感謝申し上げたい。
- 6 現場における調査ならびに、本書作成に際しては下記の方々からのご指導ご助言を頂戴している。ご芳名を銘記し感謝の意とさせていただきます。（敬称略）

青木一男 上田典男 白居直之 小山岳夫 白沢勝彦 関澤 聡 土屋 積 鶴田典昭 直井雅尚
西山克己 原 明芳 広田和穂 町田勝則 三上徹也 百瀬長秀 森崎 聡

凡 例

- 1 本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。
- 2 実測図等に掲載した方位は全て座標北、また地図等に記載した方位は真北を表している。なお、磁北は真北より西へ約6'40"の偏差がある。
- 3 遺構の測量は、平面直角座標系（国家座標）第Ⅶ系の座標値（東経138°30'、北緯36°00'）と日本水準原点の標高を基準とし、俯写真測図研究所の開発した遺跡遺構測量システムであるコーディックシステムを援用するため同所に委託した。現場にて1：20の縮尺で基本原因を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 4 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を基に、仮に下記のとおり作成した。
S A…竪穴住居跡、S C…環状溝跡、S D…溝跡・河川跡、S E…井戸跡、S K…土坑、S P…小穴、S X…性格不明遺構、T r…トレンチ。
- 5 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1：4、土器拓影1：3、石器1：1（一部2：3）等に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 6 土器の実測図において、土器の種類や黒色処理・赤色塗彩等は網掛けによって下記のとおり表記した。



- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）で保管している。なお、出土遺物の注記記号は「M63」と表記してある。

目 次

序 文	
例言・凡例	
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌抄	2
第3節 調査の体制	4
第II章 調査成果	5
第1節 調査地の位置と地形	5
第2節 発掘調査歴	7
第3節 調査の概要	10
第4節 遺構と遺物	17
(1) 弥生時代中期後半	17
(2) 平安時代	25
(3) その他	26
第III章 まとめ	27
第1節 土器	27
第2節 石器・石製品	28
報告書抄録	
奥 付	

挿 図 目 次

第1図 松原遺跡周辺地形図	6	第16図 SA 7 実測図	23
第2図 調査区と既往調査地点	8	第17図 SA 7 出土遺物実測図	23
第3図 調査区全体図(1)	11~12	第18図 SA 8 実測図	24
第4図 調査区全体図(2)	13~14	第19図 SA 8 出土土器実測図	24
第5図 SA 2 実測図	17	第20図 SK 1 実測図	24
第6図 SA 2 出土土器実測図	17	第21図 SK 1 出土土器実測図	24
第7図 SA 3 実測図	18	第22図 SA 1 実測図	25
第8図 SA 3 出土土器実測図	18	第23図 SA 1 出土遺物実測図	25
第9図 SA 4 実測図	19	第24図 その他の遺物実測図	26
第10図 SA 4 出土土器実測図	19	第25図 石器・石製品実測図(1)	32
第11図 SA 5 実測図	19	第26図 石器・石製品実測図(2)	33
第12図 SA 5 炭化材検出状況実測図	20	第27図 石器・石製品実測図(3)	34
第13図 SA 5 出土土器実測図	21	第28図 石器・石製品実測図(4)	35
第14図 SA 6 実測図	22	第29図 石器・石製品実測図(5)	36
第15図 SA 6 出土土器実測図	22		

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経過

平成5年3月、上信越自動車道の須坂長野東ICまでの開通は、従来進展のあまりなかった長野市にとって高速交通網時代の到来を感じさせる出来事であった。加えて1998年長野冬季オリンピックの開催に向けて会場施設の建設やそれらをつなぐアクセス道路の整備、また本格着工となった北陸新幹線の建設も今後実施されるようになり、長野市は空前の開発ラッシュとなる。

上信越自動車道の長野市への玄関口長野ICは長野市の南部、松代町に所在する。付近に展開する松原遺跡は、上信越自動車道本線部分について長野県教育委員会主導の下、平成元年度より財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下、勸学館文センター）により発掘調査されている。また平成2年度には南長野農業協同組合集出荷場建設事業、同年から平成4年度まで主要地方道中野更埴線道路改良事業、平成3年度から4年度には市道松代東111号線道路改良事業の各事業ともなう発掘調査が当教育委員会により実施されている。このように周辺の著しい開発状況の中、長野市（松代支所土木課担当）は高速道関連事業として現市道拡幅を目的とした、「市道松代東63号線道路改良事業」の計画を打出し、長野県教育委員会指導の下、長野市教育委員会が記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。



写真1 松原遺跡航空写真 (Scale=1:8000 平成2年6月18日撮影)

第2節 調査日誌抄

1992年（平成4年）

- 10月16日～ A地区 重機による表土剥ぎ作業開始。
- 10月19日(伊曇り 機材搬入、テント設置作業。
- 10月20日(伏雨天 現場作業中止。
- 10月21日(伊曇り 壁面精査および分層。遺構検出、遺構面掘下げ作業開始。
- 10月26日(伊晴れ 遺構検出作業。トレンチ掘下げ後写真撮影。
- 10月27日(伏快晴 不明遺構およびトレンチ掘下げ作業。
- 10月28日(伊晴れ 重機による2次遺構面検出。壁面精査、遺構検出作業。
- 10月29日(伊曇り 遺構検出作業、遺構面掘下げ作業。
- 10月30日(伊晴れ 遺構（SP群・柵状遺構）、トレンチ掘下げ作業。
- 10月31日(伊晴れ 遺構面清掃後写真撮影。コーディックシステム（CS）測量。トライアル掘下げ作業。現場作業一時中断のため機材撤収。
- 12月9日(伊～ B・C地区 重機による表土剥ぎ作業。
- 12月14日(伊晴れ 機材搬入。テント設置。安全対策用バリケード・ロープ設置。遺構面検出作業。
- 12月15日(伏降雪 壁面精査。
- 12月16日(伊晴れ 壁面精査・遺構検出作業。SX1・掘乱1掘下げ作業。
- 12月17日(伊晴れ B区遺構検出作業。C区SD1～3等遺構掘下げ作業。
- 12月18日(伏降雪 現場作業中止。
- 12月19日(伊晴れ B区SA1掘下げ作業。検出面より人骨・獣骨検出。C区SA等遺構掘下げ作業。SA1・SK1精査後写真撮影。
- 12月21日(伊晴れ C区SA2～5及びSD5掘下げ作業。SA2・3精査後写真撮影。
- 12月22日(伏晴れ C区SA3～5・SD6等遺構掘下げ。SK2精査後写真撮影。C区CS測量。
- 12月24日(伊曇り C区SA4・5等遺構掘下げ作業。
- 12月25日(伊晴れ B区人骨・獣骨取上げ作業。C区SA等掘下げ作業。B区CS測量。



写真2 A区重機による表土剥ぎ



写真3 A区 遺構面検出



写真4 A区 遺構面掘下げ



写真5 B区 遺構面掘下げ

- 1月5日(快晴) B区遺構検出作業。C区遺構図結線。
 1月6日(快晴) B区遺構検出作業。C区全体写真撮影。
 遺構図結線。
 1月7日(雨天) 現場作業中止。
 1月8日(快晴) B区遺構及びトレンチ掘下げ作業。
 1月11日(快晴) B区SA6等遺構掘下げ作業。C区SA5
 5炭化材検出状況精査後写真撮影。
 1月12日(快晴) B区SA7等遺構掘下げ作業。SA6 P
 i t tより大型給刃石斧出土。C区SA5
 完掘状況精査後写真撮影。
 1月13日(快晴) B区遺構掘下げ作業。SA6精査後写真
 撮影。C区SA5柱材板の薬剤処理作業。
 1月14日(小雨) B区遺構掘下げ作業。全体精査後写真撮
 影。CS測量。C区SA5柱材板取上げ。
 1月16日(曇り) B区個別写真撮影。遺構図結線。機材撤
 取。平成4年度の現場作業を終了する。

1993年(平成5年)

- 7月19日～ D・E区 重機による表土剥ぎ作業。
 7月26日(快晴) 壁面精査および遺構検出作業。
 7月27日(快晴) 遺構検出作業。SD等遺構掘下げ作業。
 7月28日(快晴) SD等遺構掘下げ作業。
 7月29日(快晴) トレンチ・遺構等掘下げ作業。
 7月30日(快晴) トレンチ・遺構等掘下げ作業。
 8月2日(快晴) トレンチ・遺構等掘下げ作業。
 8月4日(曇り) 遺構面精査。全体写真撮影。機材撤取。
 8月5日(快晴) コーディックシステム(CS)測量。
 8月6日(快晴) 遺構図結線。全調査区における全ての現
 場作業を完了する。



写真6 C区大雪後の調査



写真7 D区 遺構掘下げ



写真8 平成4年 調査参加者

調査期間	平成4年10月16日～ 同年10月31日 平成4年12月9日～平成5年1月16日 平成5年7月19日～ 同年8月6日
延作業員数	244人
起因事業面積	6,000㎡
保護対象面積	2,500㎡
実質調査面積	1,070㎡



写真9 平成5年 調査参加者

第3節 調査の体制

本調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄（～平成4年度）

教育長 滝澤忠男（平成5年度～）

調査機関 長野市埋蔵文化財センター 所長 小山正（～平成4年度）

所長 荒井和雄（平成5年度～）

所長補佐 山中武徳

所長補佐 矢口忠良（平成5年度～）

庶務係 庶務係長 山中武徳

職員 青木厚子

調査係 調査係長 矢口忠良（調査担当者）

専門員 中殿章子（土器実測）

主査 青木和明

専門員 横山かよ子（～平成5年度）

主事 千野浩

専門員 笠井敦子

主事 飯島哲也（主任調査員）

専門員 山崎佐織（調査員、平成4年度）

専門主事 小松安和（～平成4年度）

専門員 山田美弥子（調査員）

専門主事 羽場卓雄

専門員 寺島孝典（調査員）

専門主事 太田重成（土器拓本）

専門員 西沢真弓（平成5年度～）

専門主事 清水武（平成5年度～）

執筆参加者 久保勝正（三重県立斎宮歴史博物館学芸員）

久保邦江（奈良市埋蔵文化財調査センター技術吏員）

調査員 矢口栄子・青木善子（遺構・遺物図浄書）

発掘参加者 相澤輝志子・上田清・上田富子・北原久美子・駒沢規子・清水春子・関崎文子・多城恵子・塚田道三・常田千代江・西川一郎・野村孝子・橋爪孝次・深沢要作・村松正子

整理参加者 池田見紀・岡沢治子・勝田智紀・小泉ひろ美・小林まゆ佳・田中由美子・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

測量委託 有限会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治（〒380 長野市鶴賀678番地）

調査を遂行していく上において多くの方々・機関からご指導・ご協力をいただいている。重機の手配やトイレ設置など様々な点でご援助を賜った有限会社小林正信工務店、新協建設株式会社の関係諸氏、調査に関するご指導をいただいた財団法人長野県埋蔵文化財センター調査研究員の方々には感謝申し上げる次第である。また現場における発掘調査において仮寒の中、地元松代町の皆様方にはご尽力を賜った。重ねて厚く御礼申し上げます。

第II章 調査成果

第1節 調査地の位置と地形

調査地周辺を流れる千曲川は、更埴市で長野盆地に流入し流路を東北に転じ、立ヶ花を盆地からの流出口とし先行性峡谷を飯山盆地へ流れていく。この間、直距離約25kmに対して高度差は僅か20mに過ぎず、流路攻撃面には河食崖をつくり堆積面には自然堤防を形成し、山脚を縫って蛇行している。水勢の強い直線的な流路をもつ犀川に対し、ゆるやかに蛇行する複雑な山麓線は、まるでアラスカ海岸を想起させる。

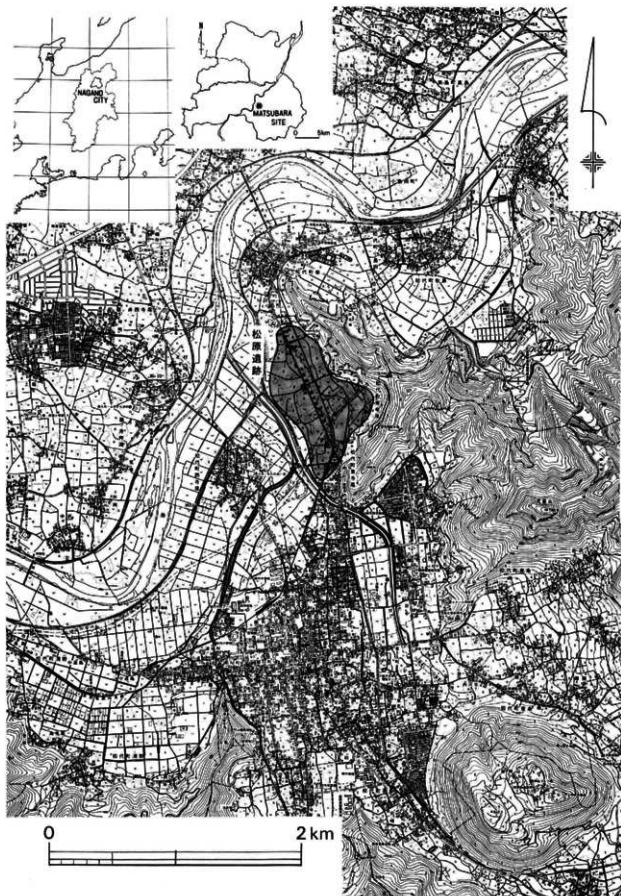
1752（宝暦2）年、松代城から約1km北へ遠避け、蛇行を小さくした現流路に開削する以前は、松代城の北側から象山・離山・愛宕山（寺尾城山先端）を通して東寺尾の山沿いを流れていた。現在では調査区より東側の地形の落ち込みと、北端の柴地籍にある化石湖金井池の存在によってかろうじて読み取ることができる。この千曲川は自然堤防の堆積によって後背湿地となり、清野・大室では水田や一部に蓮田が経営されている。またその左岸には鳥状に自然堤防を発達させ、四ツ屋遺跡・松代城北遺跡・牧島遺跡など原始からの集落遺地を助けている。

松原遺跡も松原自然堤防の一角に所在する。『長野市表層地質図』によると、旧千曲川流路上および松原自然堤防は砂と礫の氾濫原堆積物が表出しており、事実県道中野更埴線（現国道403号線）の改良事業にともなう発掘調査でJ区より検出された礫層面は、地表面からの深淺にかなりの差を有しながらも広く東寺尾地籍に展開しているものと思われる。

現在松原自然堤防上は桑園や長芋栽培が行われ、近年リンゴや巨峰の果樹園も盛んである。両端の柴や東寺尾集落からの住宅地進出が始まっており、またガソリンスタンドなどの開発予定もあることから今後急速な変貌をもたらすと予想される。しかし良好に各時代がバックされる松原遺跡は、調査費用・期間ともに増大させ、開発事業者に二の足を踏ませているらしい。



写真10 調査区（B・C区）遠景



第1図 松原遺跡周辺地形図

(S = 1 : 30000)

第2節 発掘調査歴


松代町東寺尾地籍に位置する松原遺跡は、金井山と西側に流れる蛭川との間に展開する遺跡である。千曲川の氾濫原とされる当地はその都度地形の変化が著しかったと判断され、各時代もこの地形変化に影響を受けたものと見られ、遺構集中度にも大きな差異が認められる。

本遺跡は古くから弥生時代以降の複合集落として周知されておりその規模は大きい。上信越自動車道が遺跡の中央付近を東から南へ弧を描くように貫く形で横断し、その影響もあって周辺の関連開発事業も活発となりこれまで多くの発掘調査が実施されている。現在のところ本調査をもって松原遺跡内の開発による発掘調査はほぼ一段落となることから、各地点ごとの調査概要をまとめて松原遺跡の歴史的環境とする。

1 高速道地点

平成元年度より平成3年度にかけて上信越自動車道建設工事にともなう発掘調査が労働理文センターにより実施され、縄文時代前期から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。調査では各時代堅穴住居跡を中心に多くの遺構が検出された。堅穴住居跡の総数は、縄文時代前期末～中期初頭31軒、縄文時代中期後半～後期前半11軒、弥生中期後半296軒、弥生時代後期45軒、古墳時代前期18軒、奈良・平安時代750軒など1151軒を数える¹⁾。縄文時代は前期末から後期前半の集落で住居跡のほか土坑や焼土跡、無数の小ピットによる柵状遺構も検出され、今後の研究に一石を投じようである。弥生時代中期後半の大集落は断面がV字を呈する溝に囲まれたいわゆる囲郭集落で、打製・磨製石鏃など多量の武器形石器の出土から、この集落が緊張状態にあることを伺わせるものとして注目される。出土した土器についても充実しているほか、住居跡とは直接的な関係はないものの覆土より出土した人面付土器も注目に値する。なお県道と長野電鉄河東線に挟まれた調査区では28基からなる礎床木棺墓群が検出されている。弥生時代後期と古墳時代前期にも小規模ながら集落が展開する。また遺跡東側、金井山の山麓には古墳時代後期の松原1号墳が調査されており、周辺に該期集落の存在を予想させるものである。再び大集落が展開する奈良・平安時代の集落に関してはその規模が膨大なものであり、現段階において全容を把握することは困難ではあるが、大量の該期土器とともに髻の銚型と思われる仏具の銚造関係資料や石製のサイコロが住居跡から出土している。中世は主だった遺構は観察し得ないものの、土壌墓や井戸のほか曲物に取められたと目される火葬骨や五輪塔などの遺物が、金井山山麓の傾斜面に集中して確認されている。

2 農協地点

南長野農業協同組合集出荷場施設建設事業にともない平成2年度に当教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代中期後半と平安時代の遺構が検出されている。弥生時代中期後半は住居跡26軒のほか多くの遺構を検出した。3次面25号住居跡床面からは石文が1点出土している。なお高速道地点の河川跡からも3点出土しているという。また高速道地点で検出され、本地点においてもその一角が確認された河川跡は、弥生時代中期後半には集落内を蛇行して横切り、集落が兩岸に分断した形となっている。環濠も河川跡を一部利用するような形で巡らされる²⁾。この河川に阻まれた集落間かどの様な関係があったかについても今後の課題となろう。奈良・平安時代の住居跡は35軒検出されている。2次面（平安時代前半）33号住居跡から出土した土師器と須恵器の杯の底部には同じ「」の刻印を有しており、このことは土師器と須恵器を同じ集団が製作しているという可能性を示すもので、今後該期における土器製作集団の在り方を考える上で良好な資料といえる。

3 県道地点

主要地方道中野更埴線道路改良事業（後に国道403号線）にともない平成2年度から平成4年度にわたって発掘調査が実施されている。遺跡の東から南へ弧を描きながら横断した高速道地点に対し、この県道地点は遺跡



第2図 調査区と既往調査地点 (S = 1 : 5000)

を南北に縦断する形で調査され、これによって遺跡の範囲がほぼ明確になったといえる。長野ICに接続する新設道路（バイパス部分）については最大幅18mを確保できたことから遺構の検出件数も多いが、現県道の拡幅部分に関しては幅5m前後の調査しか行えなかったため、遺構全体を把握できた例はあまりない。弥生時代中期後半は住居跡51軒、環状溝跡13基、土塙墓1基などが検出されている。環状溝跡は松原遺跡内において普遍的に存在する円形状に巡る溝状遺構で、その区画内には多数のピット、中央付近には灰跡と思われる焼土も確認され、平地住居とも想定される遺構である。土塙墓は1基のみしか検出されなかったが周辺にまだ存在するのであろうか不明である。骨の遺存状況は良好ではなかったものの、胸部の肋骨に接するように基部の折れた石鏃が1点出土している。弥生時代中期後半の松原遺跡が緊張状態にあるものと仮定するならば戦乱の犠牲者とも考えられ、今後の研究動向が注目される。古墳時代は後期の住居跡が2軒検出されている。後述する松代東111号線地点の調査においても4軒が確認されていることから、周辺に該期の集落が小規模ながら展開しているものと思われるが、金井山山麓で確認された後期古墳と関係があるのだろうか。奈良・平安時代の住居跡は36軒確認されている。特筆すべき遺構としては製錬炉状遺構が10基とあって検出されており、10世紀前半～中頃にかけてのものと思定され、内部からは炉内滓や流動滓などのほか、鍛冶羽口・フイゴ羽口が出土している。

4 松代東111号線地点

市道松代東111号線道路改良事業にともない平成2年度から3年度にかけて発掘調査され、弥生時代中期後半から中世に至るまでの遺構が検出された。弥生時代中期後半住居跡はほかで検出されたような密集化はなく、7軒が確認されたのみで、遺跡の西端付近に位置するものと想定される。このほか古墳時代後期住居跡4軒、奈良・平安時代は住居跡13軒が確認されている。奈良時代21号住居跡からは古骨、ガラス製丸玉が出土している。

5 松代畜場地点

松代畜場周辺環境整備事業にともない平成3年度に発掘調査を実施したが、明確な遺構の検出には至らなかった。遺物の出土量も僅少であることから、松原遺跡の集落外と思われる。旧千曲川流路上に位置しており、古代においては居住域として選地されなかったのであろう。

註

- (1) ここに示した数字は、朝県埋文センターが毎年発行している『年報』に記載されている遺構検出数を単純に合計したものであり、今後正式報告された場合には数値に誤差の生じる可能性もある。
- (2) 農協地点の調査において、環濠と目される遺構は検出されていない。

引用・参考文献

- 朝長野県埋文センター 1989 『年報』6 「(8) 松原遺跡」
朝長野県埋文センター 1990 『年報』7 「(5) 松原遺跡」
朝長野県埋文センター 1991 『年報』8 「(5) 松原遺跡」
長野市教育委員会 1991 『松原遺跡』 長野市の埋文文化財第40集
長野市教育委員会 1993 『松原遺跡II』 長野市の埋文文化財第51集
長野市教育委員会 1993 『松原遺跡III』 長野市の埋文文化財第58集

第3節 調査の概要

調査では弥生時代中期後半の住居跡7軒、溝跡13条、土坑2基、平安時代は住居跡1軒のほか井戸跡5基や溝跡なども検出されている。今回の調査は現道の拡幅ということもあり調査幅が3mと非常に狭く、検出された遺構については全体が把握できたものも多くないが、周辺の調査と比較しても遺構の密集度は高くない。遺跡の範囲について、北端は県道地点、南端は高速道地点・県道地点の調査などによって、また西端については111号線地点の調査によってそれぞれ明らかにされており、金井山と蛭川にはさまれた広い範囲に各時代の居住域が展開していたことが明確になってきた。

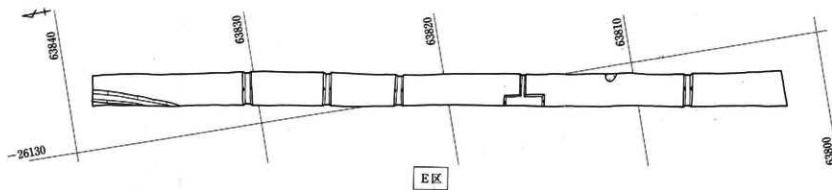
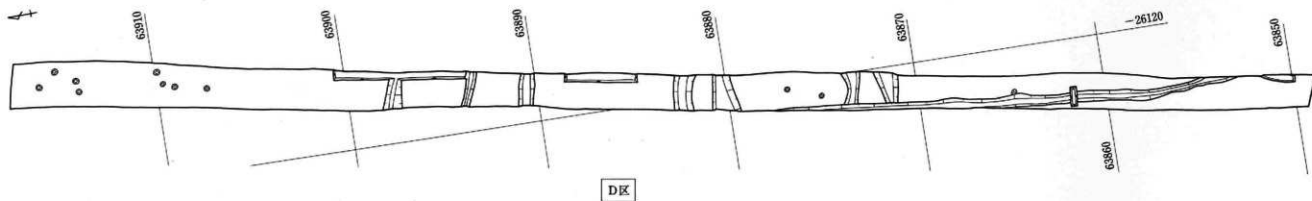
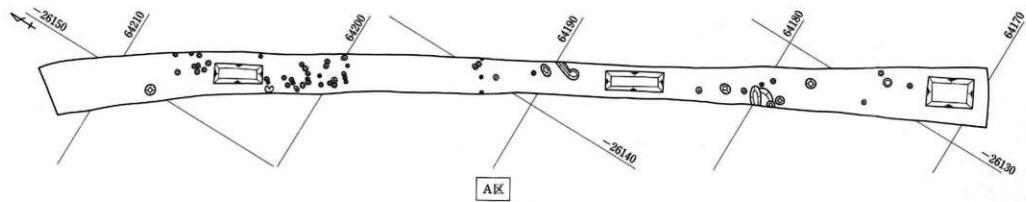
調査地点は松原遺跡の範囲内の東端付近に位置しており、遺構の密集地帯からはややはずれた地点にあたる。これは遺構の検出状況からも推測することができ、とくに平安時代の遺構が非常に少ないのが目につく。周辺は千曲川の氾濫によって幾度となく地形を変えているものと思われ、各時代の遺構密集度の差はこれに反映してくるものであろう。①県埋文センターが実施した高速道地点の調査では、弥生時代中期後半の集落内を河川（おそらく千曲川・蛭川あるいはその支流）が蛇行して流れていたことが確認されており、以降弥生時代後期から古墳時代前期ごろまでは存続していたようであるが、平安時代には埋没しその姿を消している。

発掘調査は工事の進捗状況に合わせて北側から開始し、平成4年10月16日から31日に実施した高速道より北側部分をA区、平成4年12月14日から平成5年1月16日まで実施した高速道から南、農道接続部までをB・C区、平成5年7月19日から8月6日まで実施したさらに南側をD・E区と便宜的に区分した。

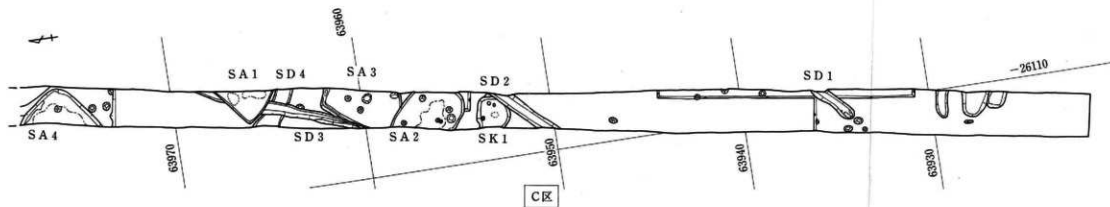
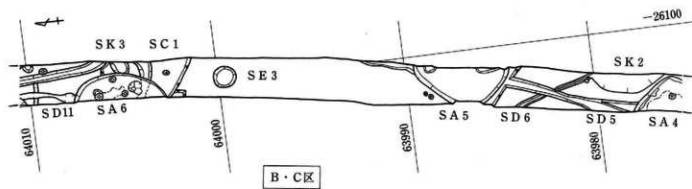
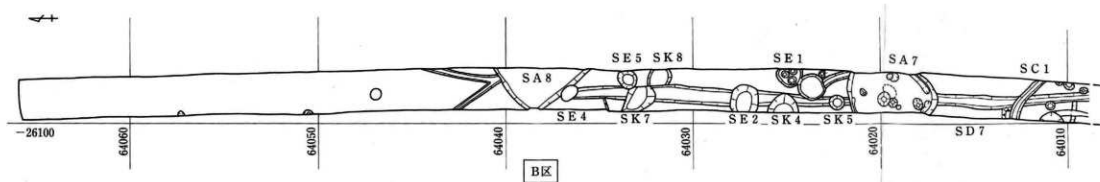
通常松原遺跡は、弥生時代の遺構と平安時代の遺構は重層しており、同一遺構面にて検出されることはきわめて少ない。しかしながら今次調査は幅約3mと狭いことから重機運用の都合上、遺構検出面を平安時代前期遺構面に設定し、弥生時代包含層までを部分的に人力によって掘り下げた。よって全体図では同一遺構面での検出として測量しているが、層的には異なっている。



写真11 調査区(B区)近景



第3図 調査区全体図(1) (S=1:200)



第4图 调查区全体图(2) (S=1:200)



写真12 A区全景 (南から)



写真13 A区全景 (北から)



写真14 B区全景 (北から)



写真15 C区全景 (南から)



写真16 D区全景 (北から)



写真17 D区全景 (南から)



写真18 E区全景 (北から)



写真19 E区全景 (南から)

第4節 遺構と遺物

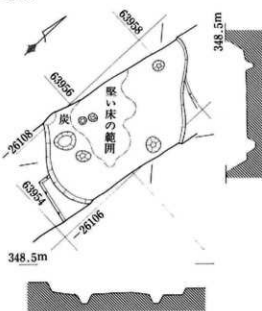
(1) 弥生時代中期後半

1 竪穴住居跡

SA 2

調査区の南端で検出された住居跡で、SA 3と重複関係にある。東壁と西壁は調査区域外により検出できなかったが、残存する形態から隅丸方形を想定する。範囲内において主柱穴は3基確認でき、方形配列になるものと思われる。住居中央付近は非常に堅いが跡は検出されず、壁溝など他の施設も検出されていない。

出土土器 [第6図] には、壺(1・4)、甕(5・6)、台付甕(2)、高杯(3)がある。壺は頸部付近の破片で、1は縄文を施したのち5本の沈線文を施文する。2は頸部に縷状文が施され、胴部は羽状文を施文している。脚部は比較の長く、口縁部は単純口縁となる。5・6は胴部破片で波状文を施文している。3は全面に赤彩され、ヘラミガキを施す。杯部は欠損しているが高杯となるものと思われる。



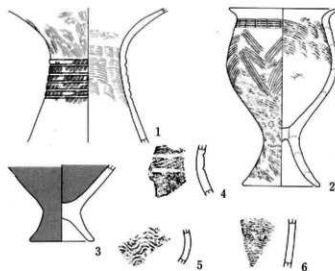
第5図 SA 2実測図



写真20 SA 2全景



写真21 SA 2土器出土状況



第6図 SA 2出土土器実測図 (S=1:4, 4~6はS=1:3)

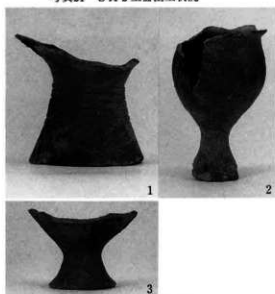
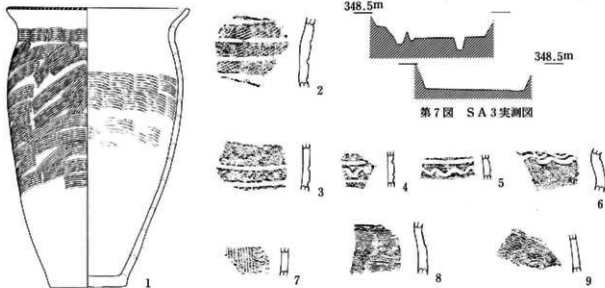


写真22 SA 2出土土器写真

SA 3

SA 2・SD 3と重複関係にあり、東側半分程が調査区域外により検出できなかったが、長方形を呈する住居を想定する。範囲内において主柱穴と思われるものは1基のみであり、平面形については不明である。床面は比較的明瞭に検出できたが全体に軟弱で、炉跡も確認できなかった。なお北壁から西壁にかけて壁溝が検出されている。

出土土器 [第8図] には壺(2~5)と甕(1・6~9)がある。壺は全て頸部付近の破片で2・3は縄文を地文として沈線文を施す。1は頸部に縷状文、胴部には斜状文(羽状文)を施文するが、比較的長胴形を示す点、該期の甕の形態としては特異である。



第7図 SA 3実測図

第8図 SA 3出土土器実測図 (S=1:4, 2~9はS=1:3)



写真23 SA 3全景

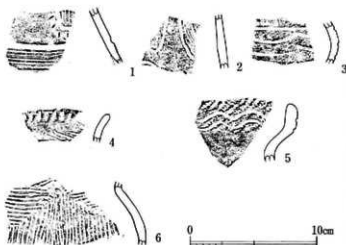


写真24 SA 3出土土器写真

SA 4

SD 5 と重複関係にあり、東側約半分が調査区外にあるため全体を確認することはできなかったが、検出された部分より方形を呈する住居であると考えられる。範囲内において主柱穴は1基のみ確認され、北壁には壁溝と支柱穴が1基検出されている。床面は、中央付近の広い範囲が非常に堅く、そのほかの部分は比較的軟弱である。炉は確認されていない。

出土土器 [第10図] には壺 (1~3) と甕 (4~6) がある。壺はすべて胴部付近の破片で、1・2は懸垂文が施文されている。4は単純口縁、5は受口状を呈する。6は「コ」字重文を施文しており、台付甕となる可能性もあろう。

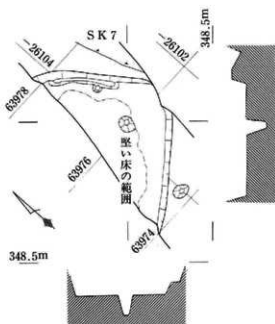


第10図 SA 4 出土土器実測図 (S = 1 : 3)

SA 5

SD 5 と重複関係にあり、SA 4 同様東側半分が調査区外により検出できず不明瞭であるが、検出された部分より隅丸長方形を呈する住居を想定する。床面は比較的明瞭に確認でき、中心には堅緻な床面を確認した。壁際では周溝も一部に残っている。また炉跡と思われる小穴には若干の被熱部が残存していた。範囲内において主柱穴は2基確認したが、うち1基は炭化した柱材が残存し、さらに床面上からはおびただしい量の炭化材が出土しており、垂木や桁等の住居の上部構造材がそのまま倒壊したような検出状況である。部分的に床面あるいは壁等に被熱したと思われる痕跡が確認され、焼失住居である。

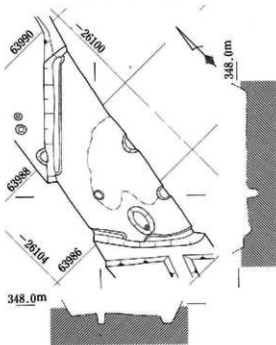
出土土器 [第13図] には壺 (1・2・8~12) 甕 (3・13~16)、台付甕 (4)、鉢 (5~7) がある。壺は頸部に集中的に施文される。3はユビオサエによる弱い波状口縁となる。



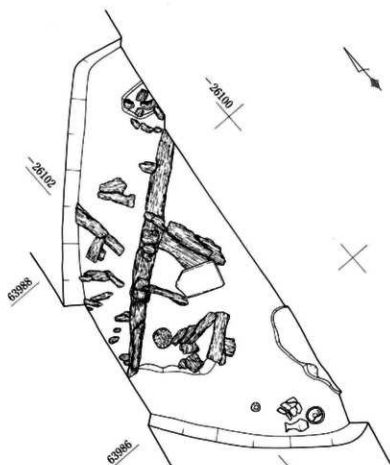
第9図 SA 4 実測図



写真25 SA 4 全景



第11図 SA 5 実測図



第12図 SA 5 炭化材検出状況実測図 (S = 1 : 40)



写真28 炭化材検出状況近景(1)



写真29 炭化材検出状況近景(2)



写真30 炭化柱材検出状況



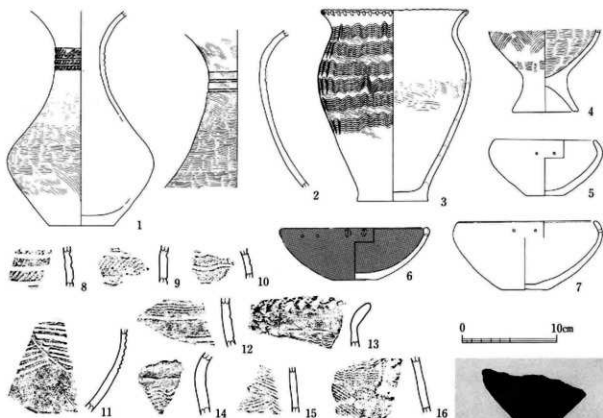
写真26 SA 5 炭化材検出状況全景



写真27 SA 5 全景



写真31 遺物出土状況



第13図 SA 5出土土器実測図 (S=1:4、8~16はS=1:3)

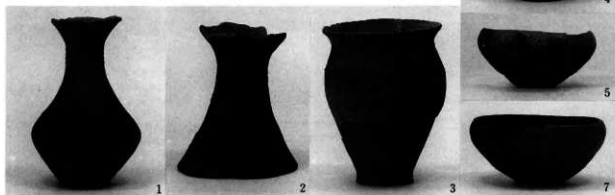


写真32 SA 5出土土器写真

SA 6

SK3・SC1と重複関係にあり、遺構のほとんどが調査区外で、東側の一部を調査できたにすぎない。住居平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと見られる。主柱穴は2基のみ確認され、住居の平面形から想定するとおそらく円形を呈するのではないかとと思われる。床面は調査区壁中央付近で堅いものの、他の部分については軟弱である。範囲内において炉は確認されなかった。



写真33 SA 6遺物出土状況

出土土器 [第15図] には壺 (5~10)、甕 (1~3・11~13)、鉢 (4) がある。1は頸部に波状文、胴部に櫛描きによる交差文を施文している。なお柱穴内からは大型蛤刃石斧が出土している。

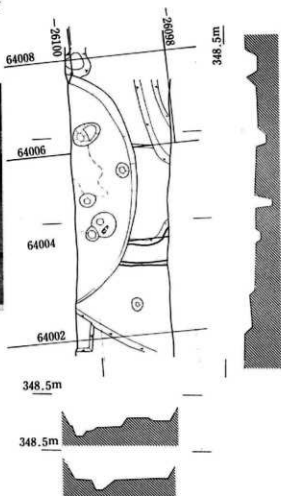


写真34 SA6全景

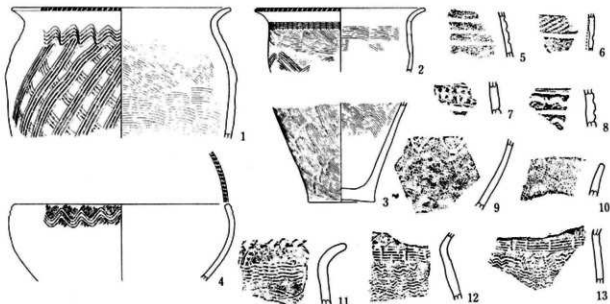


3

写真35 SA6出土土器写真



第14図 SA6実測図

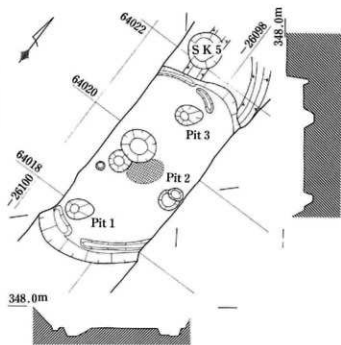


第15図 SA6出土土器実測図 (S=1:4, 5~13; S=1:3)

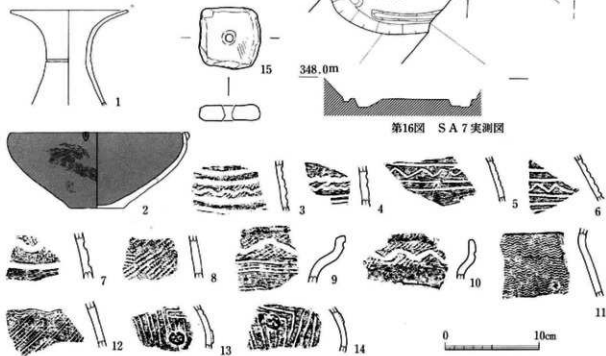
SA 7

SD 7 と重複関係にある。東西が調査区外にあるため住居の中央部分だけの調査ではあったが、今回確認された住居の中では比較的良好に検出された住居で、隅丸方形を呈する。主柱穴は3基、方形配列となり中央には竈が検出された。壁際には全周しないものの壁溝が検出され床面は全体に軟弱である。

土器は壺の頸部(1)と鉢(2)の他小破片が多かったが、有孔方形石板も出土している [第17図]。



第16図 SA 7 実測図



第17図 SA 7 出土遺物実測図 (S=1:4、3~14はS=1:3、15はS=1:2)



写真36 SA 7 全景

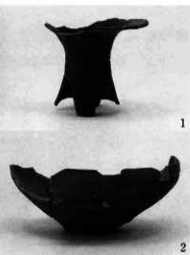
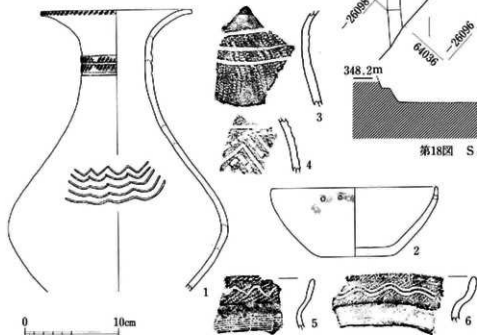


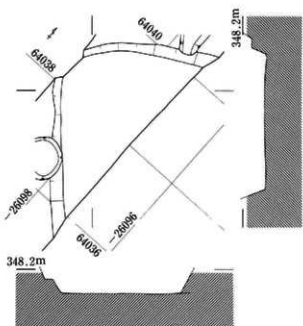
写真37 SA 7 出土土器写真

SA 8

東南が調査区外のため住居半分だけの調査であったが、隅丸方形を呈するものと思われる。ただし検出過程において、もう1軒別の住居跡の重複あるいは建替え等の痕跡の可能性を確認したが、SA 9の認定は困難であった。柱穴および堅緻な床面は霜降も影響したため明確に確認できない。土器は壺(1)と鉢(2)の他小破片が多い [第19図]。



第19図 SA 8出土土器実測図 (S=1:4, 3~6はS=1:3)



第18図 SA 8実測図

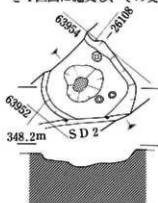


写真38 SA 8出土土器写真

2 土坑

SK 1

SD 2と重複関係にある直径約2mの円形土坑で、深さは検出面より34cmを圍る。底面は摺り鉢状に凹み、5mm程の薄い炭化物層が堆積していた。出土した台付甕 [第21図] は、口縁端部に縄文、頸部に簾状文、胴部には2本橋の「コ」字重文を4区画に施文し、その交点と中央胴下半部にはボタン状貼付文が配される。



第20図 SK 1実測図



写真39 SK 1全景



第21図 SK 1出土土器実測図

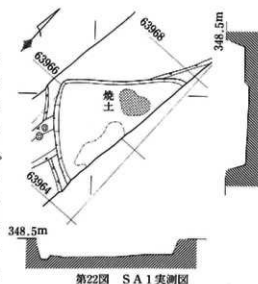


写真40 SK 1出土土器写真

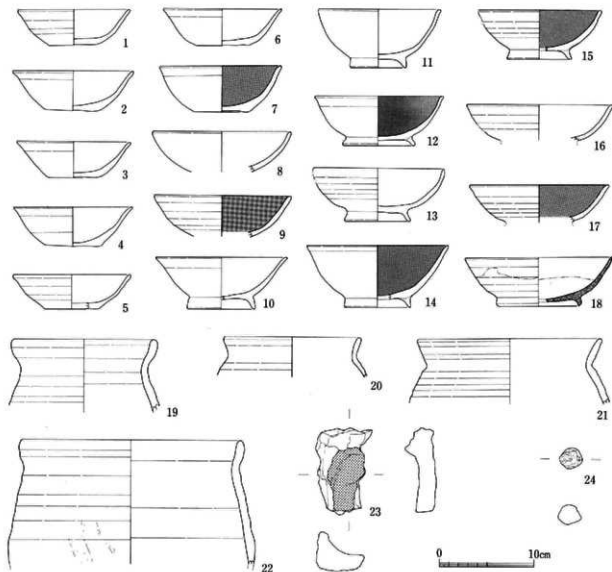
(2) 平安時代

SA 1

SD 3 を切る住居跡と思われる。東側半分以上が調査区外となるが、およそ一辺 3 m 程度の方形を呈するものと思われる。検出面から床面まで浅かったものの、カマドの痕跡と思われる焼土部からは良好な土器群が出土した。痕跡から推測するとカマドの位置は北西で、壁辺の中心より若干東寄りに設置されていたらしい。また一部に堅緻な床面が残存している。出土土器 [第23図] には土師器の杯類 (1~17) と甕類 (19~22) がほとんどである。杯の多くは底部糸切り成形で、灰軸陶器 (18) は軸の濃掛け技法と高台形態から大原 2 号窯併行期に相当するものと思われる。またカマド本体粘土の破片あるいはフィグ羽口の押え粘土と思われる土製品 (23) と土玉 (24) が出土している。



第22図 SA 1 実測図



第23図 SA 1 出土遺物実測図 (S = 1 : 4、23・24は S = 1 : 2)

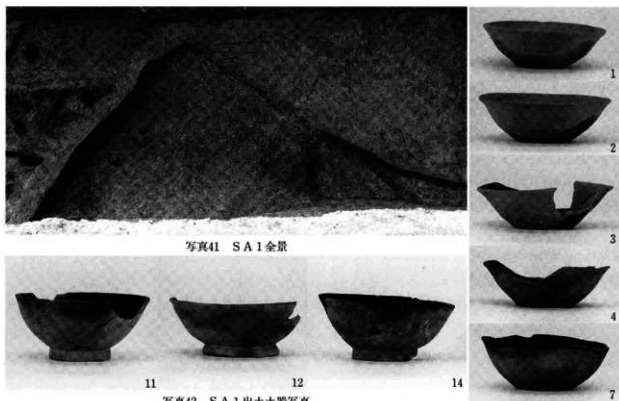
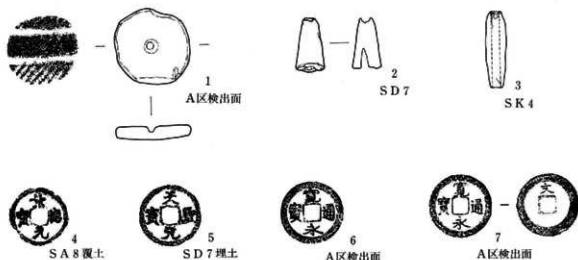


写真41 SA1全景

写真42 SA1出土土器写真

(3) その他

その他の遺構出土遺物および中世以降の遺物について記述する。A区の検出面からは弥生壺形土器の体部破片を転用した円板状有孔土製品の未製品(1)と、近世の銭貨「寛永通宝」3点(6・7)が出土している。この寛永通宝は3枚重なって出土し、うち1枚は腐食が著しく拓本に耐えられない。B・C区ではSK4より出土した土錘やSD7から出土した不明土製品は平安期以降の所産と考えられる。SA8覆土から出土した「景德元宝」(4)は、1004年初鑄とされる北宋銭と思われるが、それを写して近世の天正～元禄期に私鑄したとされる鋳銭の可能性もある。またSD7から出土した「天聖元宝」は1023年初鑄とされる北宋銭であろう。



第24図 その他の遺物実測図 (S=1:2、4~7はS=2:3)

第Ⅲ章 ま と め

第1節 土 器

今回の調査では住居跡8軒をはじめとして数々の遺構が検出されている。調査面積が小さく、周辺の調査例と比較すればその量は必ずしも多いとはいえない。また遺跡範囲の東端付近に位置することから、遺構の密集地帯からははずれた位置にあたる。遺構の検出数が少ないため各遺構から出土した遺物も全体にみれば多くなく、遺跡の全体像をつかむには程遠い。ここでは出土した各時代の土器についてこれまでの調査で得られた資料と照らし合わせながら概観してみたいと思う。

(1) 弥生時代中期後半

住居跡7軒、土坑1基（遺物の出土していないものはとくに遺構名をつけていないため、実数はこれをうまわる）、溝跡（環状溝跡を含む）13条が検出されている。しかし調査範囲が狭い上に遺構の検出数も少なく、なおかつ遺構全体を検出・確認できた例も少ない。遺物の出土量もこれに影響され少ないが、中ではSA5の遺物の出土量はほかに比べれば多い方である。壺形土器は少なく完形となるものもない。甕形土器は完形となるものもあり壺形土器と比較すれば全体の様子は把握できる。

壺形土器は文様帯が頸部あるいは胴部といった部分に集中する傾向が認められ、胴部がへけ調整によって仕上げられており、文様帯は沈線文を主体とする構成となる。縄文施文も少なくなり全体的に簡素な感じを抱く。甕形土器については頸部から胴部付近まで籌掻きによる羽状文や波状文が集中的に施文され、頸部には縹状文を施文しているのも見られる。そのほかの器種には台付甕形土器、高杯形土器、鉢形土器などがあるが、破片資料が多く全体を把握できるものは少ない。これらは栗林式土器の中でも新しい段階に顕著な様相を示すものである。

住居の重複はSA2と3に見られるものであるが、土器の様相にはそれほど大きな差は認められない。御巢塚文センターが実施した高速道地点の調査、あるいは当教育委員会の調査した農協地点・県道地点・市道松代東111号線地点の調査においてもこの新段階の時期に膨大な量の住居が検出されていることを考慮すれば、この重複も時間差にはそれほど影響はないものと思われる。

(2) 平安時代

今回の調査で平安時代の遺構と明確に把握できるものには、住居跡1軒と溝跡1条、それに井戸跡5基が確認されている。うち、井戸跡に関しては遺物の出土が皆無なため中世以降に属するものもあるように思われる。また平成5年度調査のD・E区の溝跡は遺物の出土が見られなかったものの平安期以降と思われる。調査規模もわずかではあるが、これまでの周辺の調査と比較してもこの検出数は少なく、該期の遺跡範囲の端を想定できるものであろう。遺物の出土は主に住居跡（SA1）に集中し、溝跡（SD7）からもわずかながらの出土が確認されている。様相からして10世紀後半に位置するもので、土師器が主体となる。杯および椀の内面には黒色処理されたものもあるが、ミガキを施した痕跡は認められない。須恵器の出土はなく、灰釉陶器が1点SA1から出土している[第23図・18]。灰釉陶器の内面底部には赤色顔料（朱墨か？）の付着が認められ、周辺に光沢があり指で触ると非常に滑らかいことから硯として転用された可能性が指摘できる。

第2節 石器・石製品

久保 邦江 (奈良市埋蔵文化財調査センター)

久保 勝正 (三重県立斎宮歴史博物館)

1 はじめに

石器・石製品・原石は合計130点出土している [第1表]。その内訳は、打製石鏃3点、同未製品1点、楔形石器3点、打製石鏃1点、スクレイパー1点、擦り切り石器1点、二次加工痕有剥片5点 (うち光沢を有するもの1点)、使用痕有剥片12点、磨石・敲石類3点、剥片・砕片62点、石核6点、磨製石鏃1点、同未製品5点、扁平片刃石斧3点、同未製品1点、大型蛤刃石斧3点、磨製石砲丁3点、磨製石器片3点、砥石2点、勾玉未製品1点、管玉1点、軽石8点、黒曜石原石1点 (長さ6.5cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm) である。これとは別に使用の痕跡が肉眼では観察できない円形礫・楕円形礫・礫片などの不明品60点がある。石材は黒色粘板岩、チャート、珪質頁岩～珪質粘板岩、玄武岩質安山岩、黒曜石、砂岩、ホルンフェルス、閃緑岩、閃緑岩～ハンレイ岩、凝灰岩、玉髓、硬玉などである。以下、製品・未製品の主なものについて図示し、それぞれについて記述する。

2 出土した主な石器・石製品

打製石鏃 [第25図1～4] 1 (黒曜石) は先端部を細く突出させ、側縁が緩く外に膨らむ身部分が正三角形の凹基有茎鏃である。片脚と基部を欠く。2 (チャート) は側縁が直線的で身部分が二等辺三角形を呈するやや細身の平基有茎鏃である。表面は全面に加工が及び一次面が除去されているが、裏面は中央部に主要剥離面が残っている。基部は破損しており根元が僅かに残存している。3 (珪質～珪粘) は側縁が直線的で身部分が二等辺三角形を呈する凹基有茎鏃である。表裏面とも剥離軸を同じくする剥離面を中央に残す。片脚、基部をわずかに欠く。4 (珪質～珪粘) は未製品と思われるもので、縦長剥片の両側縁に連続した加工を施す。ただし、素材剥片の末端縁が残されており、未製品としてもイレギュラーな感がある。

楔形石器 [第25図5・6] 5 (チャート) は片面に礫面を残す小型薄手のもので、断面を1つもつ。6 (チャート) は5同様に片面両側に礫面を有する小型厚手のものである。両面に節理面が残っている。

打製石鏃 [第25図7] 7 (珪質～珪粘) はバルブが発達した幅広剥片を素材にしており、頭部と機能部の一部に調整があるが、素材の一次面を大きく残している。機能部は1ヶ所、先端は使用のため稜が潰れ丸くなっている。

スクレイパー [第25図8] 8 (珪質～珪粘?) は打面縁を調整した横長に近い幅広剥片の縁辺に刃部を作出するものである。本来は破綻部分にも加工が及ぶものと思われるが、欠損している。

擦り切り石器 [第25図9] 9 (玄武岩質安山岩) は板状の大型剥片の直線的な縁辺に磨耗の痕跡をとどめる。石器の両側には表裏面に対してほぼ90度の面がある。

二次加工痕有剥片 [第26図10～12、第27図21] 10 (玄武岩質安山岩) は剥片の一部に加工を施す。擦り切り石器と同様に加工部に接する2辺および対辺が表裏面に対しほぼ90度の面を形成する。本来は加工部が5cm以上あった可能性が考慮される。11 (黒色粘板岩) は大型の幅広剥片のほぼ全面に加工を施すものである。未加工部分の腹面側には光沢がみられるが、微小剥離面には及ばない。背面には節理にそって剥離された面が残る。12 (黒色粘板岩) は三角形の厚手剥片の腹面の打面側山なり部分に二次加工を行い、内湾する縁辺を中心に微小剥離痕が連続する使用痕を残す。21 (ホルンフェルス) は扁平片刃石斧の破片に二次加工を施す。研磨面には線条痕はみられない。

敲石・磨石類 [第29図28・29] 28 (砂岩) は扁平な楕円形礫の表裏面に平滑面、側面に敲打痕をとどめ

る。平滑面は光沢がかっており、網部の濃い部分が強い。29（砂岩）は厚手の半楕円形状の礫に28と同じく光沢があった平滑面と敲打痕をとどめる。表面の中央部（濃い網部）がよりすべすべした状態である。

磨製石鏃【第27図13～16】 13（珪頁～珪粘）は側縁がやや外に膨らむ、身部が二等辺三角形形状のものである。穿孔途中の浅い凹みを有す。14～16は未製品である。14（珪頁～珪粘）は素材剥片に粗い調整剝離を施す段階のものである。左側縁には折れ面が残存し、また基部も折れ面となっており、調整剝離はなされていない。正面中央部には素材の石理面が、裏面には礫面が残存している。15（珪頁～珪粘）は表裏面のごく一部に研磨の痕跡をとどめる。16（黒色粘板岩）は横長剥片の表裏面と側縁の一部に研磨が施される。

扁平片刃石斧【第27図17～20】 17（珪岩）は小型で基端の両肩は丸みをつけて仕上げられている。刃部の角度は約34度で、刃面に2本の弱い稜線が認められる。18（ホルンフェルス）は大型のもので、平面形は刃部が基部よりやや広い撥形を呈し、刃部の角度は58度である。前主面の刃部先端には使用による刃こぼれがあり、後主面の刃縁（⇔の範囲）は研ぎ直しをして新たに刃を作り出しているが、前主面とのなす角度は鈍角となっている。19（砂岩）は破損品で刃部側を欠く。研磨面には線条痕がみられない。20（砂岩）は大型の未製品で表面は中央部と基端部・両側面が研磨されているが、ほかは未研磨である。裏面は未研磨で石理面がそのまま残っている。

太型蛤刃石斧【第29図30・31】 30（閃緑岩～ハンレイ岩）は側縁がほぼ平行で、基端部は調整時のものと思われる敲打痕を残し、平基に近いが両肩に丸みをもっている。刃部は明確な稜を作り出す刃面をもたず、刃縁はなだらかな凸刃に仕上げている。刃縁には刃こぼれの痕跡は認められなかった。31（閃緑岩）は胴部の破損品である。

磨製石慮丁【第28図22～24】 22（玄武岩質安山岩）は穿孔部で半折する、もとは杏仁形のものである。23（玄武岩質安山岩）は破片で穿孔途中の凹みを有す。24（玄武岩質安山岩）は板状の素材の全周に整形のための加工を施す段階のもので、表裏面とも中央に平坦な一次面が残る。直線部分が刃部、弧状部分が背部となるものであろうか。

磨製石器片【第28図25・26】 破片のため定型的な磨製石器に分類できないものを一括した。25（砂岩）は表面の平坦な一面が平滑となっている。26（砂岩）については平滑面が側面にまで及び、網部が光沢がかっており、それを除けば石質と平滑面の状態が19の扁平片刃石斧に似ている。ただし、25・26ともに磨製石器片を利用した砥石の可能性もあろう。

砥石【第28図27】 27（凝灰岩）は表裏面に細い溝状の痕跡が残るもので、表面でより顕著である。

勾玉未製品【第29図32】 32（硬玉、いわゆるヒスイ）は正面と右側面は研磨されているが、裏面と左側面は研磨による線条痕はみられない。右側面には一条の溝が作り出されおり、これは腹部を表現したものと思われる。形體と使用されている石材から勾玉未製品と考えられよう。

管玉【第29図33】 33（玉髓、いわゆる碧玉）は孔が中心から少しずれて穿たれており、穿孔は片側からか、両側からかは不明である。

3 おわりに

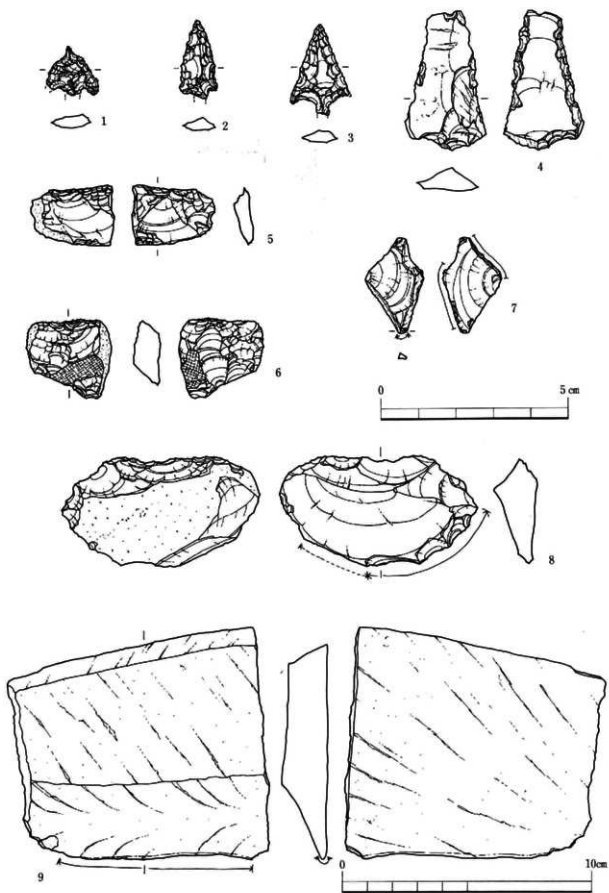
市道地区の石器類を全体でみた場合出土点数が少ないこともあって、農協地区・渠道地区との比較は困難である。両地区にみられなかった勾玉未製品が出土したことは特筆されるが、市道地区の石器類からは両地区と異なる点は特に見当たらない。市道地区の性格づけは今後の周辺の調査をまわって遺跡全体のなかで検討していく必要があるといえよう。

No	出土地区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
1	SK2	打製石鏃	1.35	1.4	0.4	黒曜石	
2	SD7	打製石鏃	2.1	1.0	0.35	チャート	未製品
3	SK2	打製石鏃	2.45	1.55	0.35	珪頁~珪粘	未製品
4	SK2	打製石鏃	3.7	2.15	0.75	珪頁~珪粘	未製品
5	SD7	楔形石器	1.6	2.2	0.7	チャート	
6	SK1	楔形石器	2.1	2.3	0.9	チャート	
7	SA7	打製石鏃	2.55	1.55	0.5	珪頁~珪粘	機能部磨耗
8	SK2	スクレイパー	2.9	5.25	1.3	珪頁~珪粘?	
9	SK2	挫り切り石器	9.25	10.5	2.05	玄武岩質安山岩	刃部磨耗
10	SA7	二次加工痕有剥片	5.6	6.85	1.25	玄武岩質安山岩	
11	SA7	二次加工痕有剥片	7.3	12.25	2.5	黒色粘板岩	光沢あり
12	SA7	二次加工痕有剥片	7.1	10.3	2.1	黒色粘板岩	
13	SA3	磨製石鏃	2.4	1.15	0.2	珪頁~珪粘	
14	SA5	磨製石鏃	2.9	1.65	0.55	珪頁~珪粘	未製品
15	SK2	磨製石鏃	2.4	1.6	0.3	珪頁~珪粘	未製品
16	SA5	磨製石鏃	3.5	1.65	0.4	黒色粘岩	未製品
17	SA7	扁平片刃石斧	2.5	1.85	0.3	珪岩	
18	トレンチ7	扁平片刃石斧	5.9	3.85	1.1	ホルンフェルス	
19	SA6	扁平片刃石斧	3.9	3.7	0.8	砂岩	
20	SA8	扁平片刃石斧	6.25	5.45	1.0	砂岩	未製品
21	SA7	二次加工痕有剥片	3.4	3.05	0.7	ホルンフェルス	扁平片刃石斧片を転用
22	SK2	磨製石砲丁	5.85	7.2	0.85	玄武岩質安山岩	
23	SA7	磨製石砲丁	2.8	3.35	0.9	玄武岩質安山岩	未製品
24	SK1	磨製石砲丁	6.95	19.1	1.9	玄武岩質安山岩	未製品
25	SD7	磨製石器片	2.15	2.55	0.7	砂岩	
26	SK2	磨製石器片	2.5	2.25	0.9	砂岩	光沢あり
27	SA7	礫石	5.4	5.0	1.45	凝灰岩	
28	SA5	礫石・磨石類	7.5	3.1	1.05	砂岩	光沢あり
29	SD7	礫石・磨石類	6.9	5.35	3.3	砂岩	光沢あり
30	SA6	大型蛤刃石斧	22.0	7.0	4.5	閃緑岩~ハツレイ岩	
31	SK2	大型蛤刃石斧	3.25	3.3	3.55	閃緑岩	
32	SP1	勾玉	3.1	1.0	0.35	硬玉	未製品
33	SD7	管玉	0.9	0.4(径)	0.2(孔径)	玉髄	

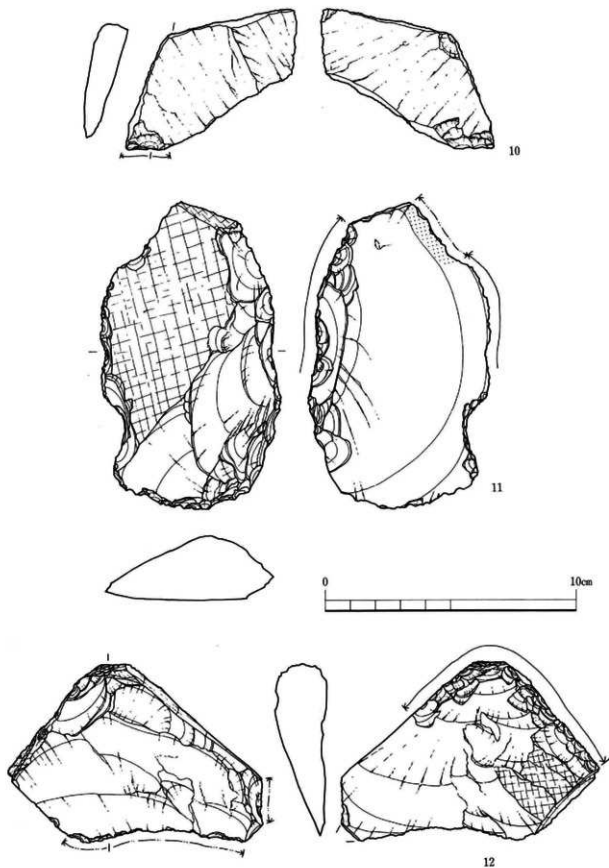
第1表 石器一覧表 (実測図掲載分)

遺 産	打製石鏃	楔形石鏃	打製石鏃	スクレナイバー	磨り切 り石器	RF U F	緑石・ 燧石器	湖内・沖内・ 湖石器	石皿	磨製石鏃	扁平片石器	大型船片石器	磨製石器丁	磨製石器片	威石	勾玉	佩石	取石	計	備 考
SA.1																	1		1	
SA.2							2											3		5
SA.3	1						3		1											5
SA.2・3							1													1
SA.4						1														5
SA.5							1		2	1(未)										4
SA.6						1		6	1	1(未)										11
SA.7	1					2	2	8			1	1	1	1(未)	1					18
SA.8								1	3											4
SA.8・9						1	2	6	1		1(未)									11
SK.1		1																		2
SK.2	2(未)					1	1	4	14	3	2(未)		1	1	1					31
SK.4							1													1
SK.5									4											4
SK.6									1											1
SD.2								1	1											2
SD.7	1	2				2	1	7		1(未)				1	1	1	1	1	18	
SP.1																1(未)				1
包合層																				4
トレンチ											1									1
計	4	3	1	1	1	5	12	3	62	6	6	4	3	3	2	1	1	8	1	130

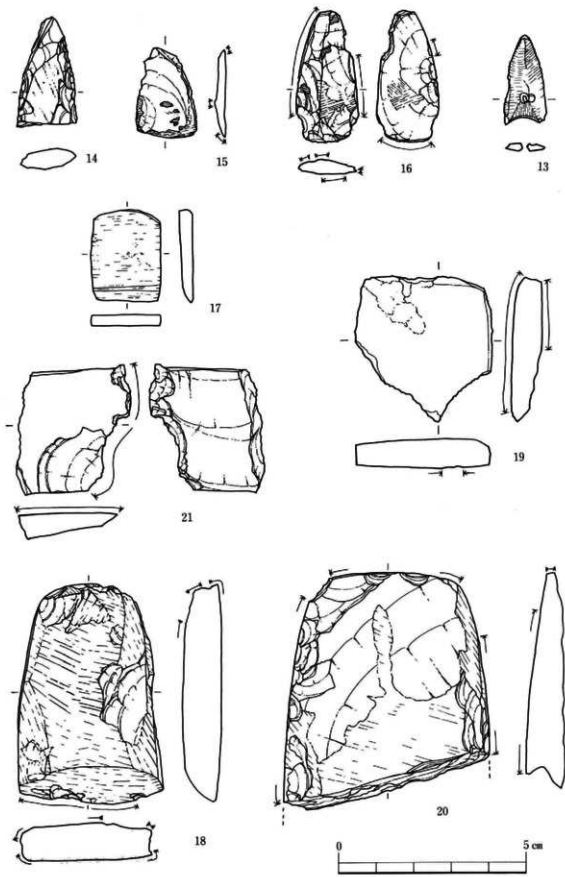
第2表 市道地区遺跡列石器一覧表



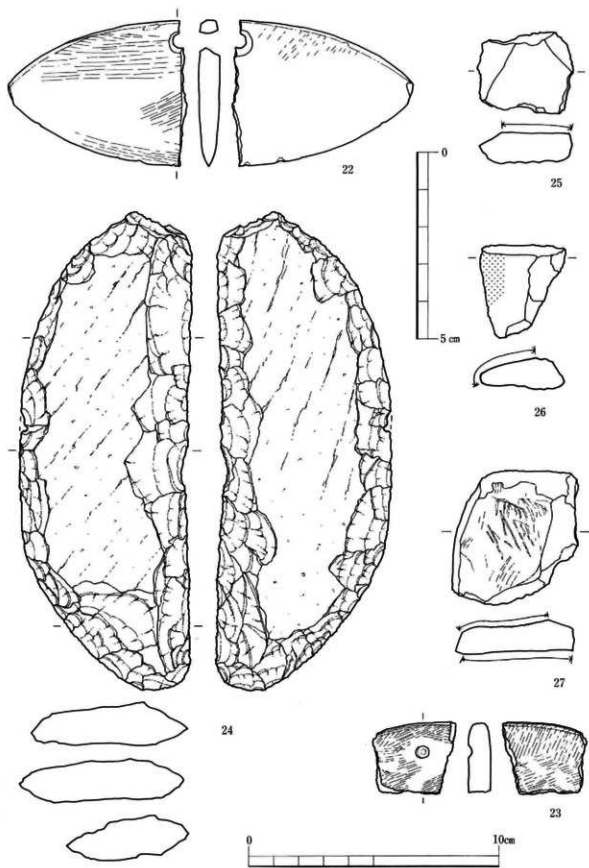
第25図 石器実測図(1) (S=1:1、9のみS=2:3)



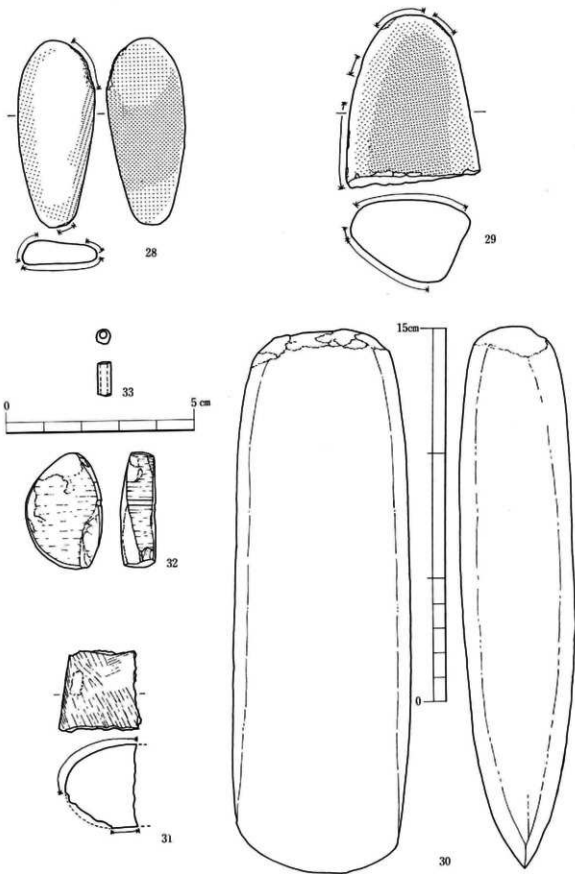
第26图 石器实测图(2) (S = 2 : 3)



第27图 石器实测图(3) (S=1:1)



第28图 石器实测图(4) (S=2:3、25·26はS=1:1)



第29图 石器实测图(5) (S = 2 : 3、32·33 1 : 1)

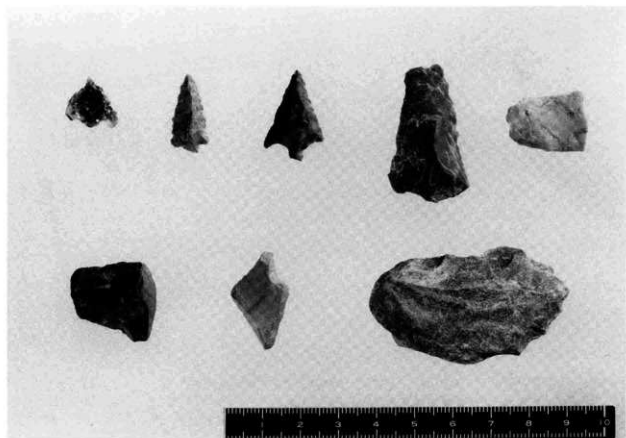


写真43 石器写真(1) (S≒1:1)

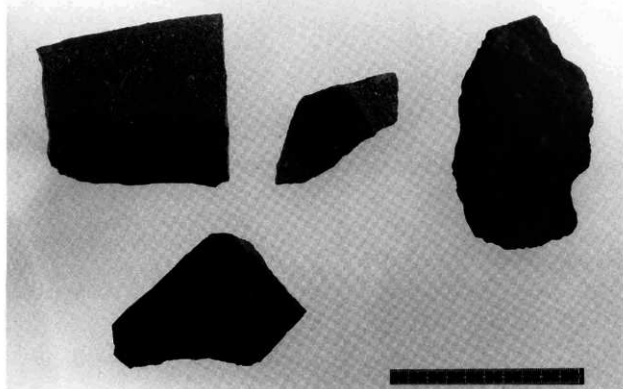


写真44 石器写真(2) (S≒1:2)

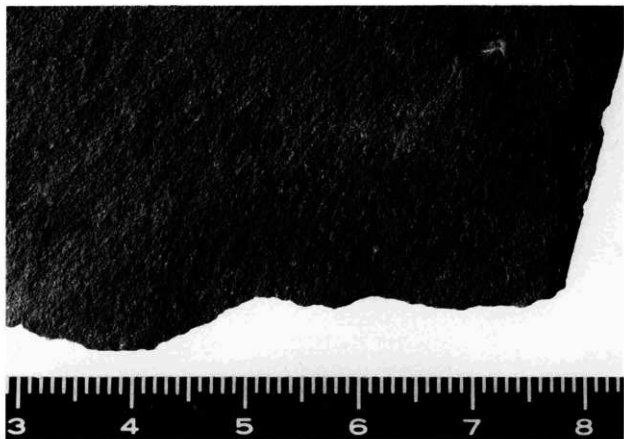


写真45 R・F00拡大写真 (S≒3:1)

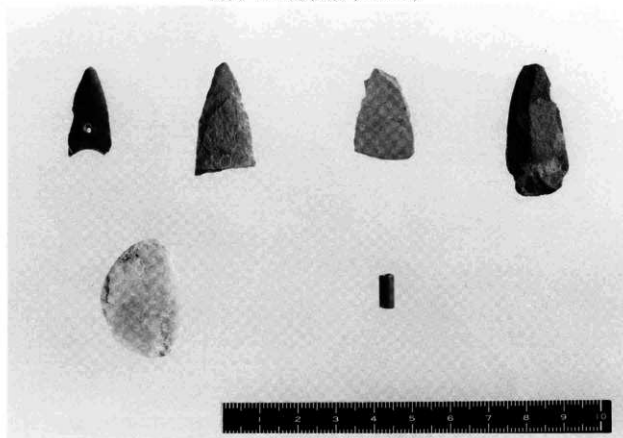


写真46 石器写真(3) (S≒1:1)

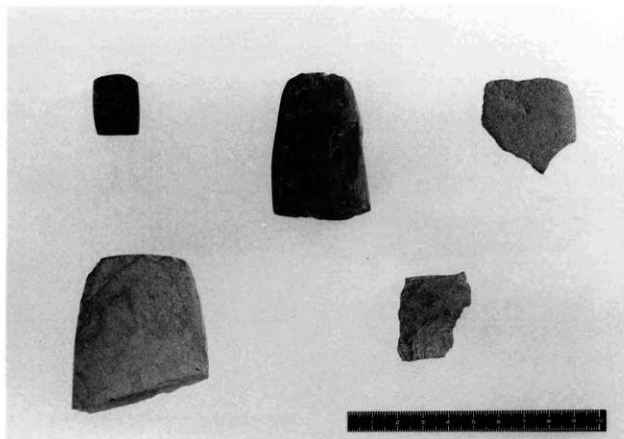


写真47 石器写真(4) (S 2 : 3)



写真48 石器写真(5) (S 1 : 2)

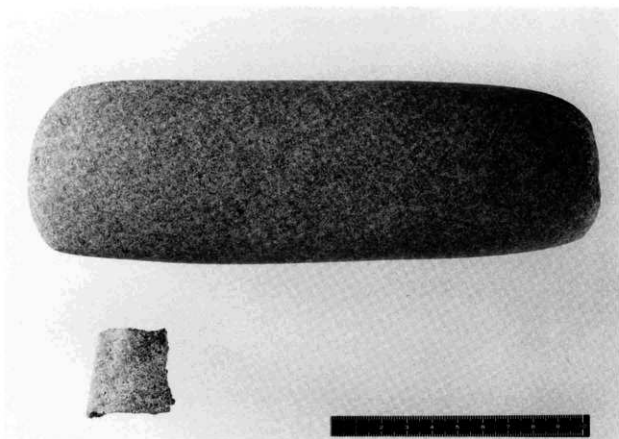


写真49 石器写真(6) (S₁2:3)

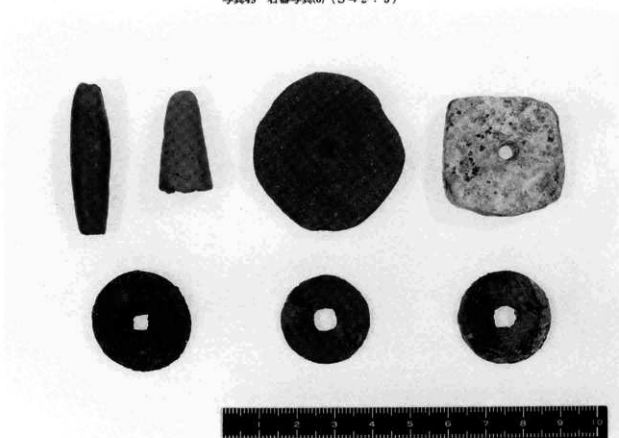


写真50 その他の遺物写真 (S₁1:1)

報告書抄録

ふりがな	まつばら いせき よん
書名	松原遺跡 IV
副書名	市道松代東63号線道路改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第63集
編著者名	寺島孝典・飯島哲也
編集機関	長野市教育委員会 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-22 長野市小島田町1414番地 長野市立博物館内 Tel 0262-84-0004
発行年月日	1994(平成6)年3月31日
印刷所	日本平版印刷株式会社(〒381 長野市東和田842番地 Tel 0262-59-9333)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町村					
まつばら いせき 松原遺跡IV	長野県長野市松代町 おがしら 東 寺尾3192-1番地 他	20201	F-026	36'	138°	19941016 ～ 19941031 ・ 19941214	1,070㎡	市道改良
				34' 40''	12° 15''	～ 19950116 ・ 19950719 ～ 19950806		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松原遺跡IV	集落跡	弥生時代 中期後半	竪穴住居跡 7軒 土坑 2基 溝跡 13条 その他	弥生土器 石器・石製品 円板状有孔土製品	
		平安時代 および以降	竪穴住居跡 1軒 溝跡 2条 土坑・小穴・ 井戸跡・その他	土師器 灰釉陶器 土師など土製品 銭貨(北宋銭など)	

長野市の埋蔵文化財

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|--|--------------------------|
| 1968年 | 第1集『信濃長原古墳群』 | 1989年 | 第32集『中条遺跡』 |
| 1976年 | 第2集『浅川西条』 | 第33集『輪南遺跡』 | |
| 1978年 | 第3集『中村遺跡』 | 第34集『石川糸里遺跡(4)』 | |
| | 第4集『塩崎遺跡群』 | 第35集『藤ノ井遺跡群Ⅱ』 | |
| 1979年 | 第5集『塩崎遺跡群(2)』 | 1990年 | 第36集『原田遺跡Ⅱ』 |
| 1980年 | 第6集『三輪遺跡—付水内坐—元神社遺跡』 | 第37集『藤ノ井遺跡群Ⅲ』 | |
| | 第7集『田中沖遺跡』 | 1991年 | 第38集『軍田城跡・下宇木遺跡—三輪遺跡(3)』 |
| | 第8集『藤ノ井遺跡群』 | 第39集『塩崎遺跡群(6)・石川糸里遺跡(5)』 | |
| | 第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』 | 第40集『松原遺跡』 | |
| 1981年 | 第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』 | 第41集『小島柳原遺跡群 中伏遺跡・浅川扇状地遺跡群 押線遺跡・横田遺跡』 | |
| | 第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』 | 1992年 | 第42集『田中沖遺跡Ⅱ』 |
| 1982年 | 第12集『浅川扇状地遺跡群—牟礼ノバイパスA・E地点』 | 第43集『南宮遺跡』 | |
| 1983年 | 第13集『浅川扇状地遺跡群 廻田遺跡・川田条里の遺構・石川糸里の遺構』 | 第44集『塩崎遺跡群(7)』 | |
| 1984年 | 第14集『石川糸里の遺構(2)・上野沢遺跡』 | 第45集『石川糸里遺跡(6)』 | |
| | 第15集『箱清水遺跡(2)』 | 第46集『藤ノ井遺跡群(4)』 | |
| 1985年 | 第16集『石川糸里の遺構(3)・(付上野沢遺跡)』 | 第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・稻添遺跡』(2分冊) | |
| 1986年 | 第17集『浅川扇状地遺跡群—牟礼ノバイパスB・C・D地点』 | 第48集『小島柳原遺跡群 中伏遺跡Ⅱ』 | |
| | 第18集『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松節—小田井神社地点遺跡』 | 1993年 | 第49集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』 |
| 1987年 | 第19集『土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』 | 第50集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』 | |
| | 第20集『三輪遺跡(2)』 | 第51集『松原遺跡Ⅱ』 | |
| | 第21集『芹田小学校遺跡』 | 第52集『田牧居稲遺跡』 | |
| | 第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』 | 第53集『岩崎遺跡』 | |
| 1988年 | 第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』 | 第54集『古町遺跡 流入堰』 | |
| | 第24集『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』 | 第55集『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』 | |
| | 第25集『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』 | 第56集『上見林遺跡』 | |
| | 第26集『東斎場遺跡』 | 第57集『石川糸里遺跡(7)』 | |
| | 第27集『小柴見城跡』 | 第58集『松原遺跡Ⅲ』 | |
| | 第28集『宮崎遺跡』 | 第59集『史跡 松代藩主真田家墓所』 | |
| | 第29集『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』 | 1994年 | 第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』 |
| | 第30集『地附山古墳群』 | 第61集『軍田城跡(2)』 | |
| | 第31集『町川田遺跡』 | 第62集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』 | |

長野市の埋蔵文化財第63集

松原遺跡Ⅳ

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 日本平版印刷株式会社